

人類即神也の宣言文について

西園寺昌美

自分のことはさておき、人類のために

『私が語ることに、想うこと、表わすことは、すべて人類のことのみ。人類の幸せのみ。人類の平和のみ。人類が真理に目覚めることのみ。』

人類が一人残らず、この境地に達するまでは、真理を理解できている人々がまず率先して、人類即神也の宣言をし印を組むことを心がけてゆく必要があります。

この『人類即神也の宣言文』の冒頭の文章では、我々は自分の幸せ、自分の病気、自分の抱えている諸々の問題、苦悩……等々、そういった自分のことはさておいて、まず人類の幸せと人類が真理に目覚めることのみを心から願い、祈ってゆく、と述べているのです。この真の意味は、まず第一に、

人類の幸せ、人類の平和、人類が真理に目覚めることのみを思いつづけ、印を組みつづけてゆくと、自分の想念が自分のことのみ把われないため、常に心が高まり、鼓舞され、勇気と喜びが湧いてくるのです。そうすると、自分の内なる本心と全く一つに融け合つてゆくので、逆に、自分の抱えている諸々のトラブルや苦しみや悩みが、いつの間にか消え去ってしまっているのに気づくのです。

自分が救われたければ、まず人を救うことです。その究極の真理を述べているのです。ここで一番問題になっていることは、“私が語ることに、想うこと、表わすことは、すべて人類のことのみ、人類の幸せのみ、人類の平和のみ、人類が真理に目覚めることのみ”と説かれている、その「のみ」の部分です。それは、自分のこと、そして自分に関する一切のことに対して想いを向けない、ということなのです。

自分を凡夫ではなく、神人と観る

この冒頭の部分をさらに確認するように、次の文章が続いているのです。

『故に、私個に関する一切の言葉、想念、行為に私心なし、

自分の為すべきことは、人のため、人類のためであつて、それを自分のできる範囲において為してゆくということです。絶対なる真理というものは、そういうものであります。

人は誰でも、まず真つ先に自分の悩みや苦しみの方に想いがゆき、把われ、執着してしまふものです。人のことは後回しにし、“自分が幸せになつたなら、自分の病気が治つたら、自分の仕事が成功したなら、自分の夢が叶つたなら……”と、自分のことばかりを考えて生きてしまうものです。

人生とは、一つの問題が解決しても、その後になが次の問題や悩みが持ち上がってくるものです。そして、次々と自分の前に起こってくるトラブルに対処しつづけ、それに想いが把われていると、いつになつても人のため、人類のために何かを為すことができないのです。

この宣言文の冒頭のように、自分のことはまずさておき、自我なし、対立なし。すべては宇宙そのもの、光そのもの、真理そのもの、神の存在そのものなり。』

この宣言を確信を持つてできる人とは、聖者賢者レベルの人々であつて、一般の凡人には恐れ多くて、目で字を追うことはできても、到底口に出して宣言することなど思いも及ばないことでしょう。

確かに宣言文そのものは、実に崇高です。自分そのものは“私個に関する一切の言葉、想念、行為に私心なし、自我なし、対立なし”と断言しているからです。この境地は菩薩そのものであるし、悟りの境地です。

そのような高い真理を、自分のような低次元レベルで生きている苦悩多き、不完全なる人間がどうして行なえようか、と思うかもしれません。だがしかし、違ふのです。この人類即神也の宣言文を宣言する時、その時の自分は（自覚はなくとも）自らを神人と観じているのです。自分のこの肉体は、宇宙神の無限なる叡智、光、能力が自由に流れ入り、流れ出る媒体となつていっているのです。

現在の自分がどのような心境であれ、かつまた、いかなる状況であろうとも、自分が宣言したことは、想念の法則により必ず実現するのです。必ず成るのです。

宇宙神は“人類一人残らず、皆いつかは人類即神也に至るのである”と断言しておられますから、人類が皆、人類即神也に行き着くためには、まず誰かが率先して道を切り開いてゆかなければならないのです。そのため、人類即神也を宣言でき、印を組める者から次々と実践してゆくのです。彼らは我即神也を宣言し、印を組みつづけた人でありますから、真理の何たるかがすでに解っています。我即神也の真理が理解できていないと無理なのです。

たとえば彼らが我即神也にほど遠い境地であろうとも、その究極の天命(我即神也)に向かって昇りつめてゆくこうとする、その心意こそ神人たる資格です。

大切なことは、“ああだ、こうだ”と知識や理屈をこね回すことではなく、まず実践することです。実践の尊さを知るべきであり、体験することが重要なのです。自分を前生の因縁の現われとして観るか、それとも神人として観てゆくかの違いです。理屈をこねるのも、素直に神人として自らを認めてゆくのも、自分自身の選択に委ねられているのです。

宣言することを躊躇し、拒むのは、自分の真の姿を知らないからです。自分を凡夫として認めているからです。人間は不完全なる者、ひ弱なる者、至らない者といった迷信を信じているからです。自分を凡夫と思い込み、信じ込み、そのよう

の扱いをしているので、いつかは必ず現実の世界に無限なる幸せ、成功、繁栄がもたらされてくるのです。

人間は、自分の心が思ったように自分の人生を運ぶものです。自ら、自分を駄目と思い込み、信じ込み、そういう心の持ち方を続けていると、本当に駄目な一生を送ることになるのです。

宣言文は自分に向かって宣言するもの

我即神也の宣言文も、人類即神也の宣言文も、他の人々に宣言するのではなく、あくまでも自分自身に向かって宣言するものです。

これらの宣言文も何十回、何百回、何千回、何万回と宣言するうちに、もう魂の中に真理そのみが深く刻みこまれ、我即神也、人類即神也の真理の生き方が当然、自分のものとなってゆきます。そうになると、もうこれ以上、我即神也、人類即神也の宣言文を自分自身に宣言する必要はなくなるのです。

これらの宣言文を宣言することは、真理より外れて生きてしまっている自分自身に真理を思い出させ、よみがえらせ、目覚めさせるために行なう行為です。あくまでも他人に向

に自分を扱っているのです。

さらに、自らを凡夫と称して、その凡夫を維持するのにふさわしい心身の扱い方をしつづけているのです。そうになると、凡夫はいつまでも凡夫の状態を続けざるを得ないのです。つまり自分が凡夫を可愛がり、思いを込めて育て上げているからです。そしてついには死に至るまで、一生凡夫でいつづけるのです。

この凡夫と称する者は、劣等感、依頼心、不安感、羞恥心の強い自分自身です。そして自分がそのように育てておいて、自分に関して一切の自信がなく、何をさせてもまず第一に人の目、人の態度、人の噂、人の言葉が気にかかり、失敗を恐れ、オドオドしているのです。

それに引き換え、神人としての生き方は全く違います。たとえば、現在の自分が神の姿とは似ても似つかない状態や心境を呈していたとしても、我即神也の究極の真理を信じ、心からそれに向かって精進努力し、自らを磨き高め上げることによって専念しているならば、その人は日々の生活を通して自分自身を我即神也と素直に思い、信じていることになるのです。

そしてさらに努力しつづけ、そのように心して自分を扱ってゆくため、現実到我即神也にふさわしいすべてが調ってくるのです。自らが自らを我即神也と称するにふさわしい心身をもって為されるべきものではなく、自分に向かって為されるべきものなのです。自分が自分に向かって“私が語ることを、思うこと、表わすことは、すべて人類のことのみ……”。故に、私個に関する一切の言葉、想念、行為に私心なし、自我なし、対立なし。すべては宇宙そのもの、光そのもの、真理そのもの、神の存在そのものなり”と説得しながら唱えてゆくのです。業想念に振り回され、前生の因縁にがんじがらめになっている自分に向かって、真理を説得しつづけてゆく行為であります。

要するに、本心が自我に向かって、今までの誤った生き方、心の持ち方を正してゆくのです。

真理の宣言は神のひびきであり、光であり、癒しそのものです。この宣言文を唱えるところに宇宙よりの強い力が働き、言霊となつて魂の奥にひびき渡り、自らの閉ざされた神人の扉が開けられ、凡夫から神人へと変わってゆくのです。宣言文の言霊ことばたまによって、自分を含め、人類を真理の目覚めへと促してゆくのであります。

故に、あまりに崇高な言葉であると思つたとしても、本心の自分にとつては決して不釣り合いではないのです。表面意識のみがおおげづき、恐れおののき、とんでもないと思ひ、拒みたくなるのですが、躊躇せず、よい言霊、素晴らしい言

霊、輝かしい言葉を、自分の魂にどんどん刻みこむことです。極端に言えば、光明なる言葉を数語のみ、心の中に充たすだけで、自分は変わってゆくものです。例えば、「絶対できる」と「必ずよくなる」と「不可能はない」という言葉を何百回、何千回、何万回、魂の中に刻み込むことによって、心の法則に導かれてゆきます。

そうなると、自分の目の前にいかなる悪い現象や、よくない状況が現われてきても、この三つの光明なる言葉が魂の中にしっかりと刻み込まれているので、以前なら「恐ろしい」「どうしよう」「不安」「絶体絶命」等という言葉や想念が湧き起こったに違いないのに、それらの否定的想念は全く出てこないのです。それよりも即「絶対できる」「必ずよくなる」「不可能はない」という光明なる想念がそれらの否定的想念、言葉に代わって出てくるので、心の法則の通り、いかなることも難なくできてしまう、よくなってしまう、可能になってしまうのです。

多くの人々のように、その心境に至ったらしようとか、もつと自分にゆとりができたらしようとか、このトラブルが解決してからしようというのでは、死ぬまで何もよいこと、素晴らしいことはできません。すべては同時進行で始めるのです。我即神也、人類即神也を宣言しようとするのも今です。こ

『地球上に生ずるいかなる天変地変、環境汚染、飢餓、病気……これらすべて「人類即神也」を顕すためのプロセスなり。』

世界中で繰り広げられる戦争、民族紛争、宗教対立……これらも又すべて「人類即神也」を顕すためのプロセスなり。故に、いかなる地球上の出来事、状況、ニュース、情報に對しても、又、人類の様々なる生き方、想念、行為に對しても、且つ又、小智才覚により神域を汚してしまっている発明発見に對してさえも、これらすべて「人類即神也」を顕すためのプロセスとして、いかなる批判、非難、評価も下さず、それらに對して何ら一切関知せず。』

人類即神也を顕すためのプロセス

この部分は、この地球上で起こっている天変地変、環境汚染、飢餓、病気等や、また世界中で繰り広げられる戦争、民族紛争、宗教対立……等はすべて人類一人一人が過去世において繰り広げてきた個人史の結果が今、現象として現われている、と述べているのです。

地球上から天変地変や環境汚染、飢餓、病気をなくすためには、人類一人一人の心の中にある飽くなき欲望を取り除か

の教えを知った今がチャンスです。そのためには、まず試してみることです。すべて同時進行がよいのです。

現象面の自分（前生の因縁によつて業想念に振り回されている自分）と、本心の自分とは決して分離しているものではなく、同一のものなのです。しかし、多くの人々は、現象面に現われている自分を本当の自分と思込んでいます。そのため、本心の自分の存在が認められないのです。本来、神我一体、自他一体なのです。それが真理なのです。

私たちが人類即神也の宣言文を宣言する時、自分の言葉がエネルギーとなつて放射されるのです。このエネルギーは、宇宙の無限なる光、エネルギーと合体し、何もものもこれに抵抗することはできず、神の神々しい光（しょうじゅう）が辺りを覆い尽くすのです。自分のもとより、人類全体を大調和、大進化へと導いてゆくのです。

ですから、本来の自分（真我）は「宇宙そのもの、光そのもの、真理そのもの、神の存在そのものである」と断言しているのです。そして少しでもそれに近づくよう、宣言している自分に恥じないよう、自分自身を維持し、育て上げてゆくのです。

なければなりません。自分が生かされていることに気づき、自分の生命の尊さを心から理解できた時、地球上から天変地変や環境汚染、飢餓、病気などは消滅してしまうのです。

人類一人一人は、余りにもおこり高ぶつてしまっています。生きるための要素は、人類一人一人に充分に与えられているはずなのに、もつと欲しい、もつと食べたい、もつと着飾りたい、もつと楽をしたい、もつと贅沢をしたい、もつと便利に、もつと豊かに、もつ幸せに……と、足ることを知りません。

この地球は、すべてが有限です。人類の一部が飽くなき欲望のためにほとんどの物を所有したならば、残りの人々は飢えに苦しまなければなりません。もう人類は、これ以上の贅沢や利便さは必要ないことに一刻も早く気づかなければ、地球上の環境はすべて破壊されてしまいます。

天変地変もすべて、人類の業欲によつて生じさせているのです。地下鉄、自動車、ゴルフ場、樹木の伐採、フロンガス、毒ガス、化学肥料……。原因を挙げたらきりがありません。これら一つ一つは別に大したことではなくても、何千、何万、何億と積み重なってゆくと、ついには大惨事を招くのです。その結果、人類一人一人の欲望が地球上に天変地変を生じさせ、環境汚染や飢餓、病気を蔓延させているのです。

しかし、宇宙神は“

これらのマイナスの現象を一つ一つ解決する必要はない。これらの現象はすべて人類即神也を顕すためのプロセスなり」と述べておられるのです。一つ一つのマイナスの現象を解決するための処理がなされても、人類一人一人の心が変わらないう限り、真理に目覚めない限り、また同じ過ちが次から次へと繰り返されつづけてゆく、というのです。

そのため、“まず率先してやるべきことは、一刻も早く人類一人一人を真理に目覚めさせることだ。”と説いているのです。“人類一人一人の心の中から飽くなき欲望を取り除くことが先決である……”と。

戦争や民族紛争、宗教対立なども、いくらその時々で引き起こされた惨事や悲劇がおさまって、一時、平和になったとしても、一人一人の心の中から差別や憎しみ、憤り、復讐心、嫉妬、怒り等の想念がなくならない限り、また民族紛争は起こり、宗教対立が生じ、戦争が行なわれてゆきます。戦争なり、対立なり、紛争を解決しても、人類一人一人の心の中にある、対立、差別、怒り、憤りなどの敵対心がなくならない限り、戦争は起こりつづけてゆくのです。

故に、宇宙神は“これらも又すべて「人類即神也」を顕すためのプロセスだ。”と述べておられるのです。人類一人一人が一刻も早く真理に目覚めて、自他一体感、神我一体感の境に目覚めることは、人類にとっての天命であります。

批判、非難、評価を下さない理由

今、世界中を賑わしている発明発見に対して、人々は心踊る思いを抱いています。特に、遺伝子解読は、二十一世紀に人類にいかなる影響を与えてゆくのでしょうか。これらの発明発見が人類にとって善きことのみに使われれば、大変素晴らしいことなのですが、必ずしも善きことのみに使われてゆくとは限りません。科学者が、人類の幸せのために、人類の平和のためにと発明発見しても、それを使いこなす人々が悪人であったり、自分たちの利益のことのみを考えて使用するならば、その発明発見は、果たしてよかつたのか、悪かつたのかは、人々には計り知れないことなのです。

“神域を汚してしまっている発明発見に対してさえも、これらすべて「人類即神也」を顕すためのプロセスとして、い

地になることにより、かつまた人類一人一人の心の中に平和を築き上げることにより、すべての闘争、紛争、戦争は解決がなされてゆくのです。

故に、人類一人一人が究極の真理、人類即神也を顕すまで待つのです。いつまで待つのでしょうか。人類一人一人の心の中に本当に平和は築かれてゆくのか、不安です、疑問です。しかし、宇宙神は“人類は一人残らず、必ずいつかは真理に目覚めるのだ。”と断言しておられます。だからこそ、真理に目覚めた者たちが、まず率先して人類即神也の宣言をし印を組みつづけてゆくのです。

“故に、いかなる地球上の出来事、状況、ニュース、情報に対しても、又、人類の様々な生き方、想念、行為に対しても、且つ又、小智才覚により神域を汚してしまっている発明発見に対してさえも、これらすべて「人類即神也」を顕すためのプロセス”なのです。人類一人一人が宇宙神より与えられている自由と創造を誤った方向に發揮しつづけ、その結果、被害を受けたり災難に遭ったとしても、これらもまた人類即神也を顕すためのプロセスなのです。

殺人、オカルト、変死……。これらもまた、それら一つ一つの事件や出来事を懇切丁寧に原因を追究し、解決がなされたとしても、人類一人一人の心の奥深くに根差している自己かなる批判、非難、評価も下さない”。この神域を汚してしまっている発明発見とは、一体どんなことなのでしょうか。

原子力の発見は、核爆弾に利用され、今日、戦争の脅威はなくなりません。かつまた、これにより人類はおろか、地上に存在する生きとし生けるものすべてが、その被害を被っているのです。そればかりでなく、今、世界中に話題を提供している遺伝子工学、臓器移植、異種交配……。短期的に考えれば、人類のためにはよいと思われることでも、長い観点から見れば、果たしてこれだよろうかと思うことも多分出てきます。

これらもまた、人間に与えられている絶対なる自由と創造を駆使してなされていることなのでありますから、我々はいかなる批判、非難、評価も下さないのです。いや、下せないのです。それらに対して何ら一切関知しないのであります。いや、してはいけないのです。

これは一見冷たそうな、愛のない対処の仕方に見受けられるかもしれませんが、実は決してそうではないのです。人の絶対なる自由に対して、誰もが介入する権利は持ち合わせてはいないのです。その人の自由意志で行なっていることに對して、たとえそれが悪の方向へ向かつていたにせよ、当の本人がそれで善かれと思えば、致し方ないことなのです。

このことを述べると、そんな無責任なことを、と抗議をなさりたい方も大勢いらつしやると思いますが、真実は真実なのです。その真実とは、人間がこの世につくり出したものは、常に変転し、動、反動のもとに存続するものもあれば、消えて無くなるものもある、ということなのです。

人間の創造が行き過ぎたり、また、神域を汚すものであれば、かの偉大なる宇宙の法則はそれらを決して許さないのです。絶対なる真理や法則が、極端な逸脱を見逃さず、介入するのです。そして、宇宙の法則に適さないものは、また調和できないものは、すべて自然消滅せねばならないように取り計らわれるのです。

人間の自由意志に一切関知せず

このように、人類即神也の真理は、究極の真理であつて、実に高い高い法なのです。半真理のように中途半端な正義や悪を振り回しても始まらないのです。

この世の正義や悪は、人間が決めたものです。真理からみれば、決して悪ではないかもしれないし、逆に正義と思ひ込んでいても、正義ではないかもしれません。絶対なる真理は、人間が編み出した半真理を超えたものですから、絶対なる真

理から見れば、人類が悪であると思ひ込んでいたものが正義であるかもしれませんし、またその逆もあります。

自由を縛ることは、たとえ神でも許されることではありません。だからこそ、歴史始まつて以来、戦争が解決しないのです。人類が定めた正義、悪の基準では、永遠に解決がなされないのです。確かに一時的には解決がなされるが、また繰り返し戦争は起こります。病気を癒し、治しても、病気はまた同じように引き起こされます。一時の解決では、完全に戦争も病気もなくならないのです。

これらの問題一つ一つは、根本的解決がなされない限り、無理なのです。根本的解決を図るためには、この世の常識の枠で取り決められた善悪、正邪の基準で対処するのではなく、絶対なる真理によつて対処しなければなりません。絶対なる真理の中に悪はありません。悪は存在しないのです。人類一人一人が真理に目覚めることによつて、悪は存在し切れなくなりません。人類すべてが真に幸せへと導かれ、平和へと築かれてゆくことこそが真の救われなのです。

真の救われとは、自分が自分を救つてゆく以外にないので、他の人が自分を救つてくれることでも、自分が他の人を救うことでもありません。あくまでも自分が自分を救い上げることこそ、究極の救われです。

絶対なる真理から言えば、この世における善悪の基準はあくまでも中途半端な半真理です。悪に手を出し、悪に染まり、悪にはまり込み、そこから救い出されてゆくのも、そのまま悪を維持しつづけてゆくのも、本人の自由意志による選択です。私たちが中途半端な善悪に把われ、愛や正義に把われ、

相手を救おうと思つても、相手が心からその気にならなければ、一時的な説得や祈りや利害によつて立ち直つたとしても、また自分の気楽な道に引きずられてゆきます。そのため私たちは、人間の自由意志に関して一切関知しないのです。

では、救われはないではないですか、これでは人類は滅亡する以外にないではないですかとおつしやりたいかもしれません。だからこそ、この究極の真理、人類即神也の宣言文と印が、人類救済のための大いなる光となるのです。

最後の部分で、

『私は只ひたすら人類に対して、神の無限なる愛と赦しと慈しみを与えつづけ、人類すべてが真理に目覚めるその時に至るまで、人類一人一人に代わつて「人類即神也」の印を組みつづけるのである。』

とあります。宇宙神は、そして宇宙の法則は、常に宇宙全

体を、地球を、人類を、完全なもの、大調和せしもの、大進化へと導いてゆくものだから、私たちがいちいち半真理のもと、批判、非難、評価を下しても始まらないのです。

また、仮に我々が真理をかざして批判、非難、評価を下したならば、そこでまた新たな対立が生じ、争いが起こるのです。そのため私たちは、すべてを宇宙の法則にゆだねるのです。宇宙の法則のもと、すべては見事に大調和し、大進化してゆくものですから、その究極の真理を信じて、自分が置かれた立場で、ただひたすら人類に対して神の無限なる愛と赦しと慈しみを与えつづけ、人類すべてが真理に目覚めるその時に至るまで、人類一人一人に代わつて、人類即神也の印を組みつづけてゆけばよいのです。私たちがただ黙つてひたすら印を組みつづけていけば、究極の真理は、必ず人類一人一人を真理に目覚めさせずにはおかないのです。

この世のすべてのものは、真理の裏づけなしに決して永続することは許されません。現在の社会、政治、経済、宗教、教育、制度には、二十一世紀に向かって宇宙的覆くつがえしが起るのです。それが今、現在なのです。新しき、輝かしき世紀を出現させるために、私たちは人類即神也を宣言し、印を組みつづけるのです。

私たちは、今日まで五井先生のみ教えである“人間と真実

の生き方”、“消えてゆく姿で世界平和の祈り”を行じつづけ、さらに我即神也、人類即神也の究極の真理を理解し、人類のために自らを捧げ尽くすほどの高さにまで至ったのです。

これこそ宇宙の法則そのものに則った生き方ですから、これからもずっと永遠に幸せと平和と喜びが保証されるのであります。

(2000年9月)

西園寺昌美著『神人誕生』より